

翻刻『源氏物語古註』（四十）——御法——

（山口県文書館蔵 右田毛利家伝来細川幽齋自筆本）

熊 本 守 雄
Morio KUMAMOTO

凡 例

一、本稿は、山口県文書館蔵の右田毛利家伝来、細川幽齋自筆『源氏物語古註』（仮称。あるいは『源氏物語抄』と称すべきか。天理図書館ならびに京都大学に分蔵されている菊亭家旧蔵本では『源氏物語抄』とある。細川幽齋が慶長五年当時在住せし丹後田辺城を石田三成により攻囲せられた際に、智仁親王の許に献呈しようとした書籍の中に見えている『源氏物語抄』が、この右田毛利家伝来本であるかもしれない）の「御法」一帖を翻刻したものである。

二、「御法」一帖は、二括より成る。即ち、料紙を何枚か重ねて二つ折にした括りが、全部で二括りある。

第一括 料紙五枚十葉（その内、端一丁は前表紙の見返しとして使われており、墨付は九丁）

第二括 料紙四枚八葉（その内、端一丁は後表紙の見返しとして使われており、墨付は七丁）

料紙十八葉の内、墨付は十六丁、三十一面に及んでいる。

三、「御法」一帖の翻字にあたっては、できるだけ原本に添いながらも、次の諸点において、一部手を加えた。

1 注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文には、読解の便を考えて、「」を付し、示した。

2 注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文に該当する箇所を、池田亀鑑編『源氏物語大成』校異篇の頁数（漢数字・ゴシック活字）・行数（算用数字）と小学館『新編日本古典文学全集』の『源氏物語』一～六の冊番号（漢数字・ゴシック活字）・頁数（算用数字）で示した。

3 原本にはないが、読みやすくすることを目的として、注釈の本文に、仮に、句読点を施し、又、私意により、濁点表記を加えた。

4 原本の本文丁数（墨付丁数を示すため、各面の終わりに「ヘ1オ」へ1ウ」へ2オ」へ2ウ」などの記号をつけた。

5 原本では、注釈の本文の各項毎に（その冒頭に）、「1」を記して、注釈を加えることを普通とするが、まま、改行して項目を立てながらも、「1」のない場合がある。そうした項目の場合に

- は、(一)と、かっこを付して示した。
- 6 現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。
- 7 本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所等には、(マ、)と記した。
- 資料の翻刻を許可していただいた山口県文書館に感謝申し上げます。

「ミのり」、哥をもて、まきの名とす。源氏五十一歳春より秋まで。むらさきのうへ四十四歳。

一、「むらさきのうへ、いたうわづらひ給し」(一三八一、四四三)とハ、わかかなの下に、わづらひ給ひてのち、あつしくなり給て、そこはかとなくなやミ給ふ事ひさしくなりぬる也。「あつしく」(一三八一、四四三)ハ、やまひのおもること也。重病なる也。「おどろくしう」(一三八一、二、四四三)とハ、をどろくほどの、御なやミならねど、とし月かさなれば、たのミなく、ならせ給へる也。「あへかに」(一三八一、三、四四三)とハ、はかなく、なりまさり給也。

一、「院のおもほし」(一三八一、三、四四三)とハ、源氏なげき給ふ事かぎりなし。しバしにてもむらさきのうへのあとにをくれのこり給はん事をなげき給ふ也。

一、「ミづからの御心ちに」(一三八一、五、四四三)とハ、むらさきのうへ、わが身にハ直子ぢましなどなければ、よにあかぬ事なく、うしろめたくおもふべきほだしだにまじらぬとおほせば、あながちかけとゞめまほしいのちとおほさぬ也。(一オ)

一、「としごろの御ちぎりかけはなれて、源氏になげかせ奉らん事のミぞ、人しれず物あハれに紫上むらさきおほされける也。

一、「のちよのために、たうとき事おほくむらさきうへせさせ給也。

一、「ほいあるさまに」(一三八一、九、四四三)とハ、あまになりて、しバしもながらへんほどハ、をこなひをまぎれなくと、たゆミなくおほしの給へど、源氏、さらにゆるし給ハず。

一、「さるハ、わが心にも」(一三八一、一〇、四四四)とハ、しかあまにならんとおほしそめたる事なれば、かく思ひたち給へるつゝに、「おなじみちにも入なん」(一三八一、一〇、四四四)とハ、入道して、をこなひつとめん事、紫上むらさきとおなじくせん源氏おほす也。

一、「ひとたび家をいでなば」(一三八一、一〇、四四四)とハ、出家しゅげせしかば、

ふた、び此世こゝよをかへりミじ、と源氏おほす也。「のちのよにハ、おなじはちすの」(一三八一、一三、四四四)引、各留半座かくるはんざ、乗花葉せりばな、待我閻たがえん浮同行人うしろぎやうじん。のちのよにハ、おなじはちすへうにむまれあふとも、此よにてハ、かけはなれてをこなひをもせんとおほす。おなじ山にいととも、むらさきのうへと、みねをへだて、あひみぬやうにてこそ本意ならめと、源氏おほす也。

一、かくのミむらさきのうへあつしくなミ給へば、此御ありさまを、いまハとゆきはなれんきぎミにハすてがたくて、中く山水すいすいのすミかにごるべくおほしとゞこほるほどに、たうちあさへたる道心だうしんおこす人々ひとびとに、こよなうをくれ給へる也。むらさきのうへの事おほすに、源氏の道心だうしんはあさく、思ひたつ人の道心にハおとれる、と也。

一、「御ゆるしなくてハ」(一三八一、二六、四四四)とは、むらさきのうへも、源氏のゆるしなくてハ、心にまかせてあまにならんも、さまあしくほいながらんとおほすに、此御ことゆへ、むらさきのうへハ、うらめしく源氏の御心を思ひ給へる、と也。わが身も、つミかろかるまじきにや、かくゆるし給ハざらんとおほす也。(二オ)

一、「年としごろ、わたくしの」(一三八一、二八、四四四)とハ、むらさきのうへ、わたくしの御願ごくわんにてか、せ給へるほけきやう千部せんぶ、くやうし給ふ也。むらさきのうへの、わたくしのとのおほす二条院にてきやうくやうし給へる也。

一、「七僧しちそうのほうぶく」(一三八一、三〇、四四四)とハ、讀師よみし、講師かうじ、呪願じゆくわん、三礼さんらい、唄師うたし、散花さんげ、堂達どうだつ、此七人のさうぎく也。物の色ぬひめよりはじめて、きよなる事かぎりなく、と也。

一、「ことごとくしき」(一三八一、三二、四四四)とハ、かねて事くしくむらさきのうへあらハし給ハねば、げんじくハしき事もしらせ給ハぬ也。「女の御をきて」(一三八一、三三、四四四)とハ、むらさきのうへの女心にかくばかりの事を思ひめぐらし給へるハいたりふかく、佛のみ

ちにさへかよハし給へる心ばへのほどを、源氏ハかぎりなしとみ奉り給へる也。

一、「大かたの御しつらひ」(一三八二14、四九5)とハ、おましのかざり、なにかの事をぞ源氏ハせさせ給ふ也。

一、樂人まひ人などハ、大将の君つかうまつり給ける。(2ウ)

一、「うち、春宮」(一三八三2、四九6)とハ、「うち」(一三八三2、四九6)ハ、禁中、「春宮」(一三八三2、四九6)ハ、あかしはらの太子、「ささひのミヤたち」(一三八三2、四九6)とは、あきこのむ中宮、明石の中宮をはじたてまつりて、「御かたがた」(一三八三2、四九6)とハ、花ちる里、あかしのうへ、みなくみずきやうし給へる也。ましてそのころ、此むらさきのうへの御法事のいとなミつかうまつり給はぬ所なき、と也。「こちたき」(一三八三4、四九6)ハ、ことくしき事也。

一、「いそのかミのよ、へたる」(一三八三5、四九6)、引、五百 塵點却の心也。ひさしくおぼしめしをきたる事とみえたる也。

一、しんでんのぬりごめに、むらさきのうへハおハします也。「みなミひんがしの戸あけて」(一三八三7、四九6)とハ、ぬりごめの戸也。

一、きたのひさしに、花ちる里、あかしのうへの御つぼして、御さうじばかりをへだて、おハします也。

一、「ほとけのおハすなる所」(一三八三9、四九6)とハ、極楽もとをかこくわくらず思ひやらる、と也。(3オ)

一、「たき木こるさんだん」(一三八三11、四九6)とハ、論儀也。引、採薪及菓しんくわら随時恭与。ほけきやうをわがえしことハたき木こりなつミ水くミつかへてぞミシ。

一、「うちやすミてしづまれる」(一三八三12、四九6)とハ、ろんぎ聴聞して、人をとしづまりたるも、むらさきのうへの御心にハ物あハれに、このころとなりてハ、なに事につけても、心ばそく臨終ち

かくほさる、也。あかしのうへに、三の宮してきこえ給ふ。「三の宮」(一三八三14、四九7)ハ、にほふ兵部卿也。

(一)、「おしからぬこの身ながらもかざりとてたき木つきなんことのかなしさ」(一三八四1、四九7)、木のミをたち入て也。「たき木つきなん」(一三八四1、四九7)ハ、如薪盡火滅をたちいれて也。けぶりとならんはて、かなしき、と也。

一、「心ほそきすぢ」(一三八四2、四九7)とハ、返しに禁句などよみてハ、のちのきこえ心をくれてや、とあかしのうへ用心也。

一、「たき木こる思ひハけふをはじめにてこのよにねがふのりぞはるけき」(一三八四4、四九7)、(3ウ)于時奉事経於千歳。佛につかへ給ふ事ハ、けふをはじめにて、此よの御よハひハ千歳もへ給はん、と也。千歳給仕の心也。

一、「たうとき事にうちあハせたるつゞミ」(一三八四5、四九7)とハ、加陀のこゑにつけての管絃也。

一、「春に心とまりぬべく」(一三八四6、四九7)とハ、むらさきのうへハ、春をこのミ給へば、のちのよまで春に執心あさからじ、と也。

一、「れうわうのまひて」(一三八四8、四九7)とハ、此がく、きうのまひ、なをおもしろき、と也。みな人ぬぎかけたるかたぬぎてまひ給ふ。きぬの色く、おかしうミゆる、と也。公卿親王なども、まひの上ずハ、てのこさずあそび給ふ也。

一、「のこりすくなし」(一三八四12、四九8)とハ、かミしもの人々のありさまを、むらさきのうへ見給ふに、けふばかりやか、るまひかなでも見んと、のこりすくなしと身を心ほそくおぼす、と也。

一、「きのふ、れいならず」(一三八四13、四九8)とハ、法事聴聞にくたびれ給て、むらさきのうへくる(4オ)しうおほしてふし給へる也。

一、年ごろ、まいりつどひあそび給し人々のかたちありさま、ざえなど、ことふえのねも、けふやき、給ふとちめならん、とおぼせば、

むらさきのうへ、よろづにつけて心ほそくおほす、と也。「ざえ」(一三八五1、四四8)ハ、才覚也。「とぢめ」(一三八五1、四四8)ハ、はて也。

一、「さしもめとまるまじき」(一三八五2、四四8)とハ、さほど、めとめてみ給ふまじき人のかほさへ、あハれと紫上ミ給へる、と也。まして、夏冬時、につけて、あそびたハぶれ、いどまじきした心ハ、などハありながら、なさけをかハし給ふかたぐハ、たれも此よにひさしくハとまり給ふべきならねども、まづわれひとりゆくゑもしらずならんこと、おほしつゞけて、あハれにおほさる、也。「事はてて」(一三八五4、四四9)とハ、法事はて、をのくかへり給ふも、さらぬわかれめきて、むらさきのうへなごりおしミ給ふ也。

「いどましき」(一三八五3、四四8)、あらしひ心也。「をのがじ、」(一三八五6、四四9)ハ、をのがぢ也。

一、花ちる里に、むらさきのうへよミてをくり給ふ也。
一、「たえぬべきミのりながらぞたのまる、世々にとむすぶ中のちぎりを」(一三八五9、四四9)。みのりに、身をもたせて也。前々よき中ハ、来世もかハラじ、と也。ほけきやうにかけて、ちぎりをむすぶ、と也。花ちる里返し、

一、「結びをくちぎりハたえじ大かたののこりすくなきみのりなりとも」(一三八五8、四四9)、けふのみのりハ、のこりすくなきともよ、かけてむすぶちぎりハたえじ、と也。やがて此つゝに、みほうし給ふ也。「ずほう」(一三八五10、四四9)ハ、きねん也。

一、さるべき所々寺々にて、御ずほうハせふだんの事になりてをこなハせ給ふ也。

一、夏になりて、むらさきのうへ、なをきえ入やうになやミ給ふ也。むつかしげにことぐしくハなやミ給ハねども、いかにおハしまさんとさぶらう人々、まづなみだにかきくれて、あたらしき御ありさ

まとみたてまつる也。

一、「中宮此院」(一三八六2、四50)とは、あかしの中宮、二条院に、行啓也。此まきに、あかしの女御、はじめて中宮といへる也。ひんがしのたいに、中宮おハしますべければ、むらさきのうへも、ひんがしのたいにおハしまして、まちきこえ給ふ也。

一、「ぎしきなど」(一三八六4、四50)ハ、むらさきのひんがしのたいにわたり給ふぎしきかハラねど、「此よのありさま」(一三八六4、四50)とハ、ひんがしのたいをも、いまばかりこそみるべかりけれ、など、心ほそく物あハれなる也。

一、「名だめんをき、給ふにも」(一三八六5、四50)とハ、中宮の供奉の公卿殿上人のとのみし給ふなだめん也。むらさきのうへも、その人かの人とかねてき、給し人々のなのりも、此たびばかりこそきくべけれ、とみ、とゞめ給ふ也。

一、「ひさしき御たいめん」(一三八六7、四50)とハ、中宮にひさしくたいめんなくて、めづらしくむらさきのうへおほされて、御物がたりこまやかなる也。

一、「院いり給て」(一三八六8、四50)とハ、源氏おハしまして、「こよひハすばれたる」(一三八六8、四50)とハ、とりのすをはなれたるやうに、むらさきのうへにそひはなれて、むとくなる心ちす、との給ふ也。「むとく」(一三八六8、四50)とハ、とくもなき也。無徳也。「まかりて」(一三八六8、四50)とは、にしのたいへ源氏ハわたり給へる也。

一、「おきみ給へる」(一三八六9、四50)とは、むらさきのうへのおきみ給へるを、源氏うれしとおほしたるも、はかなきほどのなくさめ、と也。

一、「かたぐにおハしまして」(一三八六10、四50)とハ、中宮こなたかなたとおハしますまじければ、にしのたいに中宮おハしますべ

きにあらねば、しばらくひんがしのたいにて中宮にかたらひ給はん
とむらさきのうへの給ふ也。「まいらん事、はた」(一三八六、四
50)とハ、にしのたいにかへりて、又、ひんがしのたいにまいらん
ことわりなからん、と紫上の給ふて、しバシハひんがしのたいにお
ハする也。

一、「うへハ、御心のうちに」(一三八六、四50)とハ、むらさきのう
へハ、おほしめぐらす事おほけれど、さかしげに、なきあとのこと
などの給ひいづる事もなし。たゞなべてのよのつねなきありさまを、
おほどかにことずくなに、あさはかにハあらずの給ひなしたる、こ
とにいで、おほくの給ひたるよりも、あハ^{6オ}れに、御心のうち
しるくみえける、と也。「さかしげに」(一三八六、四50)ハ、かし
こげに也。

一、「宮たちを」(一三八七、四50)とハ、あかしばらの親王たちを、
むらさきのうへ見給ても、をのくの御ゆくすゑゆかしく思ひきこ
ゆるにこそ、はかなくならん身を、しむ心のまじりたるにやとて、
なみだぐミ給へる、御かほのほひ、あハれ也。

一、などかう心ばそくむらさきのうへおほすらんとおほすに、中宮う
ちなき給ぬ。「ゆ、しげになどハ」(一三八七、四50)とは、いま
くしげにハの給ハで、物のつるでごととぞ、としごろつかうまつ
りなれたる人の、ことなるよるべなきなどを、わが侍らずなりなん
のちに、たづねおほほせ、などばかりぞきこえ給ける。「みどきや
うなどによりて」(一三八七、四50)とハ、中宮のきの御どきやう
なり。春秋ハ、大般若講讀也。此御讀經によりて、むらさきのうへ、
にしのたいにかへり給ふ也。

一、三の宮ハ、あまたの御中に、いとおかしげにありき給ふ。これハ、
にほふ兵^{6ウ}部^{6ヤウ}の宮也。むらさきのうへ、御心ちのすこしのひ
まには、おまへにすへ奉り給て、まるが侍らざらん、おほしいで

なんや、と聞え給へば、戀しかりなん。丸ハ、うちのうへよりも、
宮よりも、ばゞをこそまさりて思ひきこゆれ、との給ふ也。みかど
より、御は、宮よりも、むらさきのうへをまさりておもふ、との給
ふ也。むらのうへを、ばゞとにほふ宮の給ふ也。

(一)、「おハせずハ」(一三八七、四50)とハ、むらさきのうへなくなり
給たらバ、心ちむつかしからんとて、なみだおち給へば、めをしす
りて、まぎらハしおハする也。

一、「ほ、ゑミながら」(一三八七、四50)とハ、むらさきのうへ、な
みだおち給ふ也。おとなになり給ては、「こ、にすミ給て」(一三八
八、四50)とハ、一条院にすミ給て、此たいのまへのこうばゐ、
さくらを心とゞめてもあそび給へ。さるべからんおりハ、佛にも
たてまつり給へ、とむらさきのうへゆづり給へる也。

一、にほふミヤ打うなづきて、むらさきのうへをまもりて、なミだの
おつべ^{7オ}ければ、たちいで給へる也。此にほふ宮と女一宮をぞ、
とりわきてみさしたてまつり給はん事、くちをしあハれに紫上おほ
しける、と也。

一、あきまちつけて、むらさきのうへの心ち、いさ、かさハやくやう
におほせど、なをともしればかごとがまし。秋のあだなるに、かこ
つけけても、きえ入給ふべきさまなる、と也。「さるハ身にしむば
かり」(一三八八、四50)、引哥、

一、秋ふくいかなる風の色なれば身にしむばかり人の戀しき。
一、「露けきおりがちに」(一三八八、四50)とハ、なみだがちに、む
らさきのうへおほす也。

一、「いましバし御らんぜよ、とも」(一三八八、四50)とハ、中宮參
内あらんとおほすを、いましバし御らんぜよ、といはまほしとむら
さきのうへおほせど、「さかしきやうに」(一三八八、四50)とハ、
かしこだてに、のちの世しりがほならん、とおほす也。

一、「うちの御つかひ」(一三八八9、四503)とハ、禁中の御つかひも、中宮まいり給へ、と也。

一、「さもきこえ給ハぬ」(一三八八9、四503)とハ、中宮とゞまり給へ、とも紫上の給ハぬ也。^(マ、七ウ)

一、「あなたにもわたり給ハねば」(一三八八10、四504)とハ、ひんがしのたいに、むらさきのうへわたり給ハねば、中宮にしのたいにわたらせ給へる也。

一、「かたハらいたけれど」(一三八八10、四504)、ハ、中宮、に^(マ、二の馬)したいまちうけ奉るハ、かたハらいたく、人ぎ、もはゞかりおほけれど、みたてまつらでもかひなしとて、御しつらひをことにせさせ給て、いれ奉らせ給ふ。「しつらひ」(一三八八11、四504)とハ、おまし所のかざり也。

一、「こよなう」(一三八八11、四504)とハ、むらさきのうへ、ことなうをとろへさせ給へれど、かくてこそ、あてになまめかしき事のかぎりなさもまさりけれ、とみえ給ふ也。「あてに」(一三八八12、四504)とハ、けだかくうつくしき也。

一、「きしかたあまりに」(一三八八13、四504)とハ、すぎにしかた、わかくさかりにあざやかにおハせしおりハ、花のかほりによそへても、なをあまりありつるを、いまなやミ給へるさま、らうたげにて、「いとかりそめによをおもへるけしき」(一三八九1、四504)、^(ハ、八オ)

一、あざ露のおくてのいなばかりそめにうきよの中をおもひつるかな。よに心とゞめぬやうにおほざる、さま、にる物なく心ぐるしく、みえ給ふ也。「すゞろに物がなし」(一三八九1、四504)とハ、あぢきなくかなしき也。風うちふきたる夕に、せんざいみ給ふとて、むらさきのうへ、けうそくにより給へるに、源氏わたり給て、けふハ、いとよくおきみ給ふ。「此おまへ」(一三八九3、四504)とハ、中宮のおまへにてハ、こよなく御心もはれぐしげなめり、と聞え給ふ也。

一、「かばかりのひまあるをも」(一三八九4、四504)とハ、かくすこしなやましきのひまあるを、源氏のうれしと思ひ給へる御けしきを、むらさきのうへ見給ふも心くるしく、つるになくなりていかにおほしさハがんとおほすに、あハれなれば、

一、「をくとみるほどぞはかなきともすれば風にみだる、萩のうへの露」(一三八九7、四505)。おきあると源氏のほどぞはかなき風にみだる、はぎの露のやう^(ハ、ウ)なるわが身を、とむらさきのうへよミ給へる也。げにぞおれかへるはぎののやうにとまるべくもむらさきのうへみえ給ハぬ、と也。

一、「や、もせばきえをあらそふ露の世にくれさきたつほどへずもがな」(一三八九9、四505)、や、もすれば、きえんとみえ給ふむらさきのうへにくれずわれもやがてきえまほしき、と也。なみだ源氏はらひあへ給ハぬ也。

一、「秋風にしバしとまらぬ露の世をたれか草ばのうへとのミ見ん」(一三八九11、四505)、むらさきのきえんし給ふを、人のうへとハミぬ、たれもかくこそと中宮無常の世のかなしさのがれぬ、とよミ給へる也。

一、「御かたちども、みるかひある」(一三八九12、四505)とハ、むらさきのうへ、中宮すぐれ給たる御かたちを千とせもかくてすぐすわざもがな、と源氏御らんずる也。引哥、

一、たのむるにいのちののぶる物ならばかくて千とせもあらんとぞ思ふ。心にかなハぬ事なれば、むらさきのうへかけとめんかたなきぞかなし^(ハ、オ)かりける、と源氏おほしわびける也。

一、「いまわたらせ給ね」(一三八九14、四505)とハ、中宮ひんがしのたいへわたらせ給へ、とむらさきのうへの給ふ也。「いふかひなく」(一三八九14、四505)とハ、臨終のきハといひながら、いとなめげなるや、とて、御木丁ひきよせてふし給ふ也。「なめげ」(一三九〇1、

四50)とハ、無礼なる、と也。

一、つねよりもむらさきのうへの御さま、たのもしげなくみえ給へる也。

一、「いかにおほさるゝにか」(二三九〇2、四50)とハ、むらさきのうへの御心ちいかつとて、中宮ハ御てをとらへて、なくくみ奉り給ふ也。まことときえゆく露のやうにみえ給へば、御ずきやうのつかひ、かずしらず、と也。

一、「さきくも」(二三九〇5、四50)とは、此まへにも、物のけのわざにて、いきいで給しにならひて、夜ひとよさまぐの事をしつくさせ給へど、かひなくて、明はつるほどにきえはて給ぬ。

一、「宮も」(二三九〇7、四50)とハ、中宮も、参内なくて見たてまつり給へる、かぎりなくおぼす、と也。

一、「ことハりのわかれ」(二三九〇8、四50)とハ、生死ハあるならひともおぼされず、めづかになき事のいできたるやうに、むらさきのうへのわかれをたれくもなげき給ふ也。「あけぐれのゆめに」(二三九〇9、四50)とハ、よハあけながら、くらくとなれるいふ也。みな人ゆめうつ、とも此御わかれを思ひさだめず、まどへるさま、さらなり、とことあたらしきやうなる、と也。

一、「院ハ」(二三九〇10、四50)とは、源氏ハ、おほししづめかたければ、夕ぎりのちかくまいり給へるを、よびよせてまつり給て、いまハかぎりのさまなるを、としごろのほいありて、むらさきのうへの給しを、此きざミ、あまになし奉らん御かちにまいり給し大とこたち、こゑやめていでぬるを、たちとまれるもあらん。たれかある、との給ふ也。

一、「ほとけの御しるし、くらきみちの」(二三九一1、四50)とハ、冥途のとぶらひにだにせん。かしらおろすべき、夕ぎりはからひ給へ。僧ハたれかある、との給ふ也。心(ハオ)づよくおぼしなすさまなれ

ど、御かほもあらぬさまに源氏おぼして、御なミだのとまらぬを、ことハりと夕ぎり見奉り給へる也。

一、御物のけのなどの、これも、人の御心みだらんとて、するわざにやあらん。さらば、とてかくても、御ほいの事ハ、よろしくハ侍るべき。「ひといい夜も、いむことこのしるし」(二三九一7、四50)、引、中輩中行中根人一日斎戒處金蓮かくのごとくかミそり給て、ほとけのみちびきハあるべけれ、とむなしくなりはて給てのち、御ぐしばかりおろ給ても、ことなるかのよの御ひかりともならせ給ふまじきに、めのまへのかなしさハ、御ぐしおろし給たらんを御らんぜ、源氏の御なげきまさり侍らん、と夕ぎり申給ふ也。御いミにこもり給ふべき僧ハ、その人かの人などさぶらうと申給ふて、夕ぎりさるべき事ども、とりをこなひ給ふ也。

一、「としごろなやかや」(二三九一12、四50)とハ、おほけなくむらさきのうへに心かけ給ふ(ハウ)事ハなかりしかど、いかならんおりさだかにミ奉らん、と、ほのかにのわきゆふべ見給しおもかげわすれ給ハねば、御こゑハつゝ(マ、二カ)にきぬなりとくちをしくおぼして、むなしきからをだに、み奉らん事ハ、たゞいまにてこそあれ、と思ひ給ふに、つ、ミあへず、夕ぎりなき給ふ也。女房たちのさハぎまどひ給ふを、あなかま、としづかほにて、み木丁のかたびらを、ひあけてみ給へば、ほのくらければ、御とのあぶらちかくか、げてみ給ふに、うつくしげに、きよらにミゆる御かほあたらしさに、夕ぎりのかくのぞき給ふを源氏見給ても、あながちにいまはかくさんともおぼさぬ也けり。

一、なに事もまだかハラぬけしきながら、かぎりのさまハしるかりけりとして、源氏、御袖をかほにをしあて、なき給ふほどに、夕ぎりもなみだにくれて、めもみえ給ハねど、しゐてめをしほりあけてみ給ふに、かなしき事たくひなきに、心まどひ給へる也。(ハロ)

一、「みぐしのうちやられたる」(二三九二、四〇九)とハ、うちはへたるが、つやくとひかりありてうつくしき、と也。

一、「とかくうちまぎらハす」(二三九二、四〇九)とハ、いきたる人のほぢてまぎらハすかほよりハ、なに心なきむなしきかほの、あかぬ所なく、なのめにだにあらず、たぐひなきを見奉るに、わが玉しみの、やがてなきがらにとまれかし、と、わりなく夕ぎりおぼす也。

一、つかうまつりなれたる女房たちの物おほえたるもなければ、源氏ぞ、しるて「かぎりのともし給ふ」(二三九三、四一〇)とハ、入棺などの事也。

一、「いにしへも、かなしとおぼす事」(二三九三、四一〇)とハ、あふひのうへ、夕がほのうへなどあまたなき人を見給ひつれど、かくおりたちあつかひ給たるなければ、きしかたゆくさきたぐひなき心ちし給ふ也。

一、「やがて、その、とかくおさめ奉る」(二三九三、四一〇)とハ、八月十四日にかれ給て、やがて(ロウ)十五日に葬送し給ふ也。かぎりある事なれば、「からを見つ、も過し給ふまじきぞ、心うき」(二三九三、四一〇)、引哥、うつせミハからを見つ、もなぐさめつふかくさの山けりだにたて。

一、はるくとひろき野に、所せきまで、みえたるさほうも、たゞはかなきけぶりに、のほりぬるも、あへなく、たれもくとおぼしこがる、もかひなし。

一、「それをおぼす」(二三九三、四一〇)とハ、源氏ハ、あしのふみ所もおぼえ給ねに、か、りてぞ葬所にいで給たる也。さばかりいかめしき源氏の御身をと、げすだになかぬハなかりける、と也。御をくりの女房なども、ゆめぢにまどふ心ちして、車よりもおちぬべきぞ、もてあつかひける。

一、大将の御は、のうせ給へりし時のあかつきを思ひいで給ふに、あ

ふひのうへハ、八月十五日にうせ給て、葬送ハ廿五日なりしに、物のすこしおぼえけるにや、月のかほのあきらかにおぼえし、こよひハたゞくれ(ロウ)まどひ給へる也。よの中をいとハしくおぼしつて、むらさきのうへにをくる、とてもいくよハふべきにもあらず、かなしさのまぎれに、むかしよりのほいのままに入道し給はんとおぼせど、心よハきのちのそしりをおぼせば、此ほどをすぐさんとし給ふに、むねのせきあぐるぞたへがたき。

一、夕ぎりも、御いみにこもり給て、あからさまにもいで給ハぬ也。「あらかさま」(二三九四、四一〇)ハ、かりそめ也。風、野わきだちてふく夕ぐれに、むかしのわきのゆふべ、むらさきのうへほのかに見奉り給しことを、夕ぎり戀しくおぼし給ふに、又いまハの御時なきがらを見給たるを、ゆめの心ちし給て、かなしければ、人めにはさしも見えじ、とつ、み給て、あみだぶくとひき給ふず、のかずにまぎらハして、なみだの玉をもてけち給ふ。「もてけち」(二三九五、四一〇)ハ、もてかくし給也。

一、「いにしへの秋のゆふべの戀しきにいまハとみえしあげぐれのゆめ」(二三九四、四一〇)ぞなごりさへ、と哥よりことにつけたる也。むかしのわきの夕見たてま(ロウ)つりしおもかけ戀しきに、又いまハのなきがらゆめの見奉りしぞ、なごりさへうらめしき、と也。「なみだの玉に」(二三九四、四一〇)、引哥、よりあハせてなくなるこゑをいとしてわがなみだをば玉にぬかなん。

一、ふしてもおきても、源氏ハ、なみだのひるまなくて、あかしらし給ふ也。

一、「かゞみにみゆるかげより」(二三九五、四一〇)とハ、かゞみ御らんじても、人にハことなるかほかたちにて、又いはけなきほどより、かなしき事をなげくハつねなきよを思ひしらせん、と、ほとけなどのす、め給へるを、心づよくすぐして、つゐにきしかたゆくさきた

めしなきかなしさをみつるかな、とげんじなげき給ふ也。いまハ、此世にうしろめたきことのこらず、ひたみちにをこなひにおもむきなんに、さハリあるまじけれ、と、かく心まどひにてハ、ねがハんみちにも入がたくや、と「や、ましきを」(一三九五九、四五三)とハ、なやましき也。此かなしさをなのめに、わすれさせ給へ、と阿弥陀(あみだ)ほとをねんじ給ふ也。

一、「おぼしめしたるほど」(一三九五九、四五四)、ハ、源氏の御心にハ、さらに何事にもみ、とまへ(13オ)らず、めもとまらず、心にもか、り給ふ事あるまじく、道心におこし給ふべけれど、人にはほけくしきやうにみえじ、いまさらにわがよのすゑに、かたなく心よハきまどひにて、よをそむきたる、ながれとまらん名をおほしつ、むに、身を心にまかせぬなげきをさへぞそへ給ける。

一、「ちじのおと」(一三九六一、四五四)とは、内府、あハれをもちりすぐし給ハで、世にたぐひなきむらさきのうへうせ給ぬる事を、くちをしくあハれにおほして、しばくとひきこえ給ふ。「しばくと」(一三九六三、四五四)ハ、しげくと也。むかし「大将のは、うへ」(一三九六三、四五四)とハ、あふひのうへの、うせ給ひしも此ごろの事ぞかし、とおほしいで、そのおり、あふひのうへをおしし人の、おほくもうせ給けるかな、「をくれさきだつほどなき世なり」(一三九六五、四五四)引哥、すゑの露もとのしづくやよのなかのをくれさきだつためしなるらん。しめやかなる夕ぐれ内府給ふ。空のけしきもたゞならねば、御子、蔵人少将して源氏にたてまつり(13ウ)給ふ。あハれなる事こまやかにきこえて、はしに、

一、「いにしへの秋さへいまの心ちしてぬれにし袖に露ぞをきそふ」(一三九六九、四五五)、あふひのうへ、わかれもいまの心ちするに、又、むらさきのうへのかなしさを露をかけそへたる、と也。

一、おりから、よろづの事おほしいでられて、何となくその秋の事戀

しうかきあつめ、こぼる、なみだをはらひもあへ給ハぬまぎれ、御返しし給ふ也。

一、「露けさはむかしいまとおもほえず大かた秋の世こそつらけれ」(一三九六〇、四五五)、あふひのわかれ、むらさきのうへの哀傷、いづれとも思ひわかれず、大かたわがためにハ秋がつらき物なる、と源氏よミ給へる也。

一、物のミかなしきま、に返哥よミたらば、心よハくなりたる、と、内府めとめ給ひつべき御心なれば、めやすきほどにと、源氏用心し給ふ也。たびくなをざりならぬ御とぶらひのかさなりぬ事、とよろこびかき給ふ也。(14オ)

一、「うすずミとの給ひしほどよりハ」(一三九六三、四五五)とは、源氏の服衣うすくそめんととの給ひつれど、すこしこまやかにて奉れる也。大切ににおもふ人の服衣ハ、こくそむる也。

一、よの中にさいはひある人も、よの人にそねまれ、よきにつけても心おごりて、人のためくるしき人もあるを、あやしきまでむらさきのうへハすゞるなる人にもうけられ、はかなくしいで給ふ事も、よにほめられ、心にく、おりふしにつけて、らうくとじく、ありがたかりし御心ばへなりしかば、さしもあるまじきおほよそ人さへ、風のをと、むしのこゑにつけつ、なみだおとさぬハなし。ましてほのかにもむらさきのうへ見奉りし人の、なぐさむべき世なく、思ひなげく也。

一、ましてとしごろつかうまつりなれたる人々ハ、しばしものこれるいのち、うらめしとなげきつ、あまになり、此世のほかのすまひにおへ(14ウ)もひたつもありけりとなん。

一、「冷泉院のきさいの宮」(一三九七八、四五五)とハ、秋このむ中宮より、あハれなる御せうそこたえず、つきせぬ事ども聞え給ふて、一、「かれはつる野べをうしとやなき人の秋に心をとめざりけん」

（一三九七10、四517）、むらさきのうへハ、春をこのミ給しかば、秋をうしとてなくなり給しか、と也。「いまなんことハリしらるゝ」（一三九七10、四517）とハ、秋をうらみて、此世にとまり給ハぬか、と中宮の給ふ也。

一、「物おほえぬ」（一三九七11、四517）とハ、源氏なに事をおほしわかれぬ御心ちにも、ふミをうちかへし給ふ。おかしからんかたのなぐさめにハ、此中宮ばかりこそおハしけれ、と、いさゝか物思ひまぎる、やうにおほすにも、なミだのこぼるゝを、袖のいとまなく、え御返しかきやり給ハず。

一、「のぼりにし雲井ながらもかへり見よわれあきはてぬつねならぬ世に」（一三九八1、四517）^{（15オ）}雲客にくらみをきハめ給ふ中宮ながら、わがよをのがれんとするをかへりミ給へ、と也。「かへりミ」（一三九八1、四517）ハ、めぐミ給へ、の心也。「をしつゝ、みても」（一三九八1、四517）とハ、ふミつゝ、ミ給ても、とばかりうちながめ給ふ也。

一、「すくよかにもおほされず」（一三九八2、四517）とハ、すくやかに心おほしなせず、ほれぐしくおほししるゝ事おほき、と也。

一、「女がたにぞおハします」（一三九八3、四517）とハ、けさう心にあらず、外人にはち給ふ心也。

一、「ほとけのおまへに人しげからず」（一三九八4、四517）とハ、むらさきのうへの靈前に人しげくよせ給はぬ也。

一、「千とせをももろともに」（一三九八4、四518）とハ、むらさきうへと、千年もあらんとおほししかど、かぎりあるわかれぞくちをしき、と也。引哥、
一、かぎりあるわかれのミこそかなしけれたれもいのちを空にしらねば。

一、「はちすの露もこと事なく」（一三九八6、四518）とハ、はちすの露

と玉とミが、ん^{（15ウ）}をこなひにひたみちにいらんとおほしたて、と、人ぎゝをはかり給ふに、あぢきなくおほしやすらふ也。「ひたミち」（一三九八6、四518）ハ、直路也。

一、ミわざの事ハ、七日くの法事など源氏ハの給ふ事なけれど、大将のきミ、とりもちてつかうまつり給ふ也。

一、「けふやとのミ」（一三九八9、四518）とハ、けやよをそむくべき、日ごとにおほす也。引哥、わびつゝ、もきのふばかりハすぐしてきけふやわがよのかぎりなるらん。

一、「はかなくてつもりけるも」（一三九八9、四518）とハ、月日のつもるをも、ゆめの心ちのミし給ふ也。

一、「中宮なども」（一三九八10、四518）とは、あかしの中宮も、おほしわする、まなく、戀きこえ給ふのミなる、と也。^{（16オ）}

（日本中古文学）